

新時代へのリズム

一字一筆

静岡の今

皇位継承に伴う10連休(27日～5月6日)が始まった。毎年この時期は「ゴールデンウィーク」の大型連休だが、10日間の連休は初めての体験である。

一口に「10連休」と言っ

ても、丸々大型の連休を楽しめる人もいれば飛び飛びの連休になる人、職業によっては全く休めない人もおり、過ごし方や受け止め方はさまざまである。高齢化社会で「毎日が日曜日」の人も多く、かく言う筆者もその一人である。行楽地の混雑、交通渋滞など例年の社会現象に加えて、医療機関、金融機関、保育施設な

どもこれまで経験したことのない長い休日対応に追われている。

10連休で最も注目されるのは「昭和の日」(4月29日)、「退位の日」(4月30日)、「即位の日」(5月1日)の3日間だろう。わけても三十代以上の人にとっては昭和、平成、令和という三つの時代に思いを馳せる絶好の機会である。

「令和」の元号が発表されて日本中が新時代の到来に沸いている頃、県都・静岡市では恒例の「静岡まつり」(4月5～7日)が行われていた。「駿府で徳川家康公が家臣を連れて花見をした」という故事に倣い、1957(昭和32)年から始まった市民のまつりで、今年も家康公の花見を再現した約400人の「大御所花見行列」が駿府城公園周辺を華やかに練り歩いた。沿道の市民は、かつてこの地で「太平の世」を築いた家康公のイメージを重ねながら、それぞれの「昭和」「平成」の時代を思い起こし、「令和」の時代に胸を膨らませているようだった。



静岡まつりでダンスを踊る女性たち＝静岡市葵区、全日写連・堀野良一さん撮影

同じころ、サクラが満開の駿府城公園内の駿府大演舞場では市民参加の民俗芸能や踊りが披露されていた。赤と黒の大胆な衣装で、伸びやかな踊りを披露する若い女性グループのダンスが、家康公を愛するこの穏やかな町にも新しい時代が到来していることを告げていた。

(前静岡県監査委員・富永久雄)